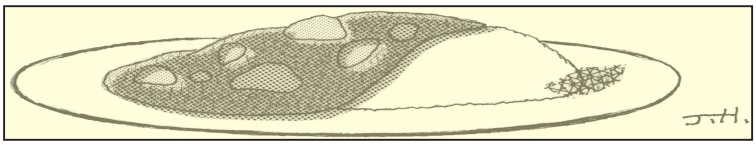
味の記憶

カレー懺悔

―文学と食を愛するハイパー編集記者・ぼのぼ氏の、わくわくエッセイコラム。忘れられない子供時代の味の数々と共に、昭和の悪ガキがよみがえる！



イラスト：服部淳子

●「カレーライス」か「ライスカレー」か？

今では「カレーライス」と呼ぶことに何の疑いを挟む余地もないが、まだレトルトやインスタントカレーが普及していなかった昭和三十年代半ばごろには、「ライスカレー」と呼ぶ方が主流だったような気がする。

いったいどちらの呼び名が本当なのか、兄姉弟間でもしばしば言い争いになったものだ。

「ライスカレーにきまっとる」

と私が言えば、姉マキコは

「ぜったいカレーライスよ」

と口をとがらせて言い張る。そこに、

「何また言い争っとるんか」

と割って入る兄サダオ。それぞれの言い分を聞いた揚句、彼が下したご託宣は、デパートの階上にある食堂や街中のレストランで供されるのが「カレーライス」で、家庭の食卓に出されるメニューが「ライスカレー」、というものであった。

その心は、「カレーライス」はカレーのルーが銀食器などのポットに盛られ、ライスを載せた皿と別々に出てきて、カレーのルーも家庭で出されるような黄みがかったものではなく、ブラウンっぽい本格派。その点、家庭で出される「ライスカレー」は、小麦粉とカレー粉を油で炒めてルーの素にするから、黄みがより強い色をしているという。

ともかくも我が家では、兄のご託宣とそれを聞いた母の裁定で、以来、そのように呼び名を区別して兄弟喧嘩を治めた。しかし、それでもなかなか納得しない姉は、別の小皿にカレールウを盛り、あくまで「カレーライス」と言い張っていた。

インスタントカレーの草分けの食品メーカーであるエスビー食品のＨＰを見ると、戦前は、陸軍では「ライスカレー」、海軍では「カレーライス」と呼ばれていたとか。すなわち、ご飯の上に黄色いカレーソースがかけられて供される大衆的なスタイルを「ライスカレー」と呼び、カレーがソースポットなどに入れられライスとは別に供される、ちょっとハイソなスタイルを「カレーライス」と呼んだらしい。どちらかというと体質が泥臭い陸軍とハイカラな海軍という当時のイメージが、カレーメニューの呼び名にも表れていたようだ。

まあ呼び名の区別の仕方には諸説あるが、兄サダオのご託宣もかなり正鵠を射ていたのである。ちなみに、「カレーライス」の呼び名が一般的になったのはどうやら東京オリンピックあたりが分水嶺らしい。

ちなみにエスビー食品（前身の会社）は大正十二年に我が国で初めてカレー粉の製造に成功して創業。昭和五年には家庭用のカレー粉を発売した。だが、まもなく戦争が始まり、食糧配給の時代に。戦後の食糧難の時期もあいまって、カレーが大衆に認知されるようになったのは昭和二十五年ころ。同社が家庭用カレー粉として赤缶のカレー粉を発売してからだ。

さらにテレビＣＭで「インド人もビックリ」のキャッチフレーズで大人気になったインスタント食品「特製エスビーカレー」が発売されたのは昭和三十九年。この頃になってようやくどの家でもカレーが食卓の定番メニューという位置を占めることになる。

それまでは、家庭でカレールウを作るのはなかなか手間がかかり、定番メニューとは言い難かったのである。

●激辛カレーに、インド人もびっくり！

その頃はまだインスタントのカレールウは出回っていなかったので、母親が小麦粉とカレー粉（ターメリック）、生姜みじん切りに自家栽培の唐辛子をフライパンで炒めてつくった。

別の大鍋では、鶏肉や豚肉とジャガイモやニンジン、玉ねぎ、タケノコ、シイタケなどを塩胡椒で炒め、それを鳥ガラスープで煮立ててシチューに。月桂樹の葉っぱや肉桂もスパイスとし

て加えていたが、今のように香辛料がすぐに手に入る時代ではない。クローブやタイムなどは、確か入っていなかったような気がする。

さて、シチューがよい加減に出来上がったら、スープの一部を取り出しルウに加えてフライパンで溶き合わせ、粘り気が出たところで、大鍋のシチューに流し込み、さらに煮込む。唐辛子もふんだんに、さらにすり合わせた生姜もたっぷり入れ、そこにウスターソースを加えて味を調えていた。これが母親特製のカレーだ。

それにしても、我が家のカレーは激辛であった。父親が呑兵衛で極端な左党派で、白飯にしょうゆやマヨネーズ、みそ汁にウスターソースと一味唐辛子をかけて食べるような滅茶苦茶な刺激派だった。そのため、あくまで我が家の食卓の味は父親が基準で、子どもたちはそれに慣れるしかないのだ。

余談だが、当時私は父親の食習慣をまねて、ごはんに醤油やマヨネーズをかけて食べたりしていたおかげで、急性腎臓炎で病院に担ぎこまれたことがある。

ともかくも、カレーを食べる時は三人とも上半身裸になって、口をシイハァシイハァしながら、頭のてっぺんから顔まで汗をドッと吹き出させつつ、ひと口食べると冷や水を一杯飲み干し、さらに夢中になってぱくついたも

大皿の「ライスカレー」を兄が何杯もおかわりすると、私も負けじと挑戦するが、五、六歳の胃袋ではそうはいっぱい食べられない。六歳違いのハンデは如何ともしがたい。無理して頬張ると、あとで必ず腹痛を引き起こすのが落ちだ。しかたなく私が大皿に残った肉桂を齧りかじりしていると、姉マキコから、

「肉桂を食べすぎるとバカになるっていうよ。あんたそれ以上バカになってどうするんね」

と憎まれ口をたたかれた。その言葉に私は余計むきになって、肉桂に齧りついたものである。

夕飯がカレーの日は、いつもなら母が何度呼んでも遊びをやめない三人が、自分から遊びを早く切り上げて、いそいそと食卓に向かう。それほどカレーの吸引力はすごかった。

●マユミ、カレー味知との遭遇

これはある「カレー曜日」の出来事。いつものように三人が夢中でカレーを食べていると、奥の食事部屋から続く居間の縁側の方でことりと音がした。しばらくすると、縁側との敷居の障子戸に穴が一つあけられた。

何だなんだ？

そこからきらりと光る眼が一つ。それが誰かはすぐにわかった。こんなことするのはあいつしかいない。そう、隣ん家のブラッシー・マユミである。このときまだ三歳と一見幼いが、一度かみつくと雷が鳴っても離れないことから、当時のプロレスラー、吸血ブラッシーになぞらえてこのあだ名がついた。

カレーの匂いは強烈だ。その食欲をそそる匂いにマユミは引き寄せられたのだった。

当時の家屋は農家の和風民家の造りで、母屋は縁側に囲まれていた。子どもたちは引き戸の玄関から入るのもまどろっこしく、昼間は縁側から自由に出入りした。もちろん、夜ふけには縁側の外囲いの雨戸をしめるのだが、夕暮れ時は開け放していることが多かった。

そんなわけで、マユミも当然のごとく縁側から上がってきたのである。それにしても、声をかけて障子戸を開ければいいものを、何度言い聞かせても、マユミはまるで野良猫のごとく、障子戸に穴を開けて覗き見るのが大好きだった。あとで障子紙を補修するのを手伝わせられるこちらの身にもなってほしいものだが、おかげで、わが家の障子戸は至る所がつぎはぎだらけであった。

マユミが現れれば、次いでやってくるのは二人の兄、シゲキとマサアキである。かわいい妹の保護監視役として

やってきて、障子穴は都合三つに増えた。

「こらあ、何こそこそしよっとか。さっさと入れ」

と兄サダオの怒声が飛ぶ。

マユミは俄かに障子戸を開け放し、鼻をクンクンさせながら

「この匂いは、やっぱりカレーじゃ」

と涎を垂らさんばかりに、ずかずかと食卓に近づいた。

そのあとを、

「家でカレーなんて羨ましか、よかねえ」

と二人の兄がお追従をいいつつ入ってきた。

すると兄サダオは、

「いいじゃろが、お前たちも腹すかしとるんやろ」

と自慢げにいった。

近所同士遠慮のない仲、こちらも悪さをして母から飯抜きを宣告されたときは、隣家に避難して晩飯をごちそうになる。お互い様なのである。おまけにうちで飼っていた猫のミイが隣家の縁側から入ってお納戸部屋のタンス裏におしっこをかけたことも一度や二度ならず。野良状態のマユミだからといって邪険に追い返すわけにはいかない。弱みがこちらにもあるのだ。

母もそのあたりを心得てか、

「ごはんはまだなの？　うちで先に食べて叱られない？」

と三人に問う。

「大丈夫じゃ」

と、すかさずマユミが答え、

「今日は母ちゃんは帰りが遅くなるって、おにぎりだけ置いていったとよ」

と二人の兄が手短に事情を説明した。

さて、大皿になみなみと盛られた母親特製の激辛カレーを三人がどう食するか見ものである。固唾をのんで見守る私たち。

マユミら三人はよほどお腹を空かせていたのか、勢いよくスプーンでひと口、ふた口、三口と掻き込んだ。

そこで皆のスプーンの手が止まる。シゲキとマサアキは助けを求めるようにコップ水に片方の手を持っていき、ぐびぐび飲んだ。そして、

「ぷはあーっ！　か・れ・え～っ！！」と叫んだ。

マユミはというと、顔を真っ赤にして口を一文字に、

「うーん」

と唸るなり、口に入れたカレーを、ご・く・りと飲み込んだ。水も飲まずにだ。そして、次の行動が素早かった。われら兄弟と同じく、上半身素っ裸になったのである。

それを見ていた兄は、

「どうや、これが大人の味や。まだ幼いお前には辛すぎるかもしれんが、慣れればこの味の深みがわかるようになる。最後まで残さんと食べろよ」

と勝ち誇ったように宣告した。

よくお相伴にあずかっていたからわかるが、マユミの家は父親が甘党で、マユミが小さいこともあり、食事は全体に甘口であった。それだから余計に我が家の特製カレーは激辛に感じたはずだ。しかし、負けず嫌いのマユミは、やせ我慢して最後まで残さずに平らげた。さすがブラッシー・マユミと異名をとるだけのことはある。

●アブツもカレー好き

カレーといえば、町に一軒だけあった映画館「わかば館」の息子アブツも大のカレー好きで、おやつも毎日カレーパンを食べていたほどのカレー・マニアであった。

アブツは身長が１９０㎝くらいはある大男で、年齢は二十歳を越えていたと思うが、精神年齢が幼く、格好はいつも丸坊主頭にランニングシャツ、ひざ丈の半ズボンという、まるで大きな子どもといった風情で、小学校の中高学年の悪ガキ連によくからかわれていた。なぜ呼び名が「アブツ」なのか、それがどういう意味なのかは誰も知らない。

彼が街中を歩いていると、「やーい、ア・ブ・ツ！　ア・ブ・ツ！」と囃したてられ、理不尽にも石を投げられた

りした。それに怒ったアブツが悪ガキ連を追い回して一悶着あることもしばしば。そこに大人たちが割って入ってアブツを叱り飛ばすと、すごすごとアブツは引き下がるのだ。

悪ガキ連は肝試しの鬼ごっこくらいにしか考えていないが、アブツにとってはなんとも割が合わない話である。

だが、アブツは私たち年少組とは妙にウマが合った。私はアブツに肩車してもらったことがあるが、１９０㎝の上から目の前に開ける視界は別世界。遠くまで視界が見渡せて心も広くなり、まるで今にも大空に羽ばたける、鳥になったような気分になる。

〈昨夜は激辛カレーでマユミとシゲキとマサアキにいっぱい食らわせたが、アブツだとどういう反応を示すだろうか。〉

そんなイタズラ心も手伝って、大鍋に残っていたカレーをご飯と一緒に弁当箱に盛り、「わかば館」まで持参することにした。

すると、ちょうど家から中学校の運動場に続く土手に上がる所で、マユミとヒトミに出くわした。

「どこへ行くと？」

と二人が訊ねる。

「わかば館や。アブツにカレーを持っていくとよ」

と私が答えると、マユミが一瞬顔をしかめた。どうやら昨日の激辛カレーの味を思い出したようだ。しかし、すぐにニヤリと不敵な笑いを浮かべ、

「うちも行く」

という。マユミもアブツに肩車されるのが大好きだったのだ。

昨晩の事情を知らないヒトミは、

「あの凶暴なアブツの所に行くの？よしなよ。何されるかわからんよ」

と心配顔で忠告した。ヒトミは私の一つ年下だが（四歳）、すごくませていて姉さん気取りの所がある。

だが、マユミは一度言い出したら最後、自分の思いを通すまでは絶対に引かない。しかたなく、嫌がるヒトミを説得して、マユミのお守り役として連れて行くことになった。

と、そこに、

「僕もー」

と金太郎腹がけをしたヒトミの二つ下の弟キュウタが現れたのだ。すぐにおしっこをちびるキュウタは自分でパンツを脱ぐらしく、いつも下半身はフリチン状態。ヒトミの母親も面倒くさいのか、放し飼い状態で放っておくようだ。

マユミとは一つ違いだが、キュウタはまだおしゃぶりを口にくわえていて髪もしょぼしょぼ、その姿はまるでキューピーちゃんのようで、いかにも幼い。マユミだってちょっと前まではよだれかけをしていたが、ここ最近、俄かに成長した。子どもの成長は早いのだ。

ヒトミもこの弟だけには手こずるらしく、

「やばい、みんな走るよ！」

といきなり走り出した。それに続く私とマユミ。

「うぎゃぁ」と泣き叫びながら、後から必死の形相で追いかけてくるキュウタ。運動場の土手を降りるところまで追いかけて来たキュウタはそこで転び、わんわん泣いていた。

その姿は無情にも見る間に遠景に。三人は運動場を突っ切った所まで一気に走り去り、そこで一息つく。もう大丈夫だろう。

三人はゆっくりとした歩きに変えて、中学校の脇の小道を下り、町なかの大通りに出た。ここまで来れば「わかば館」はすぐそこ、大通り繁華街のまん中あたりにあった。自宅から子どもの足で二十分ほどの道のりだ。

このひなびた映画館は四、五十人も入れば満席になる。後部は取り外し自由の木製椅子席が並び、最前列は土間に板敷きで、上に莫蓙を敷き観客席にしていた。客席に勾配などなく、スクリーンは一段高い壇上にある。演目は一昔前のものが多く、映写機が熱くなるとフィルムがすぐに切れてしまう。上映中にいきなりブーンと音がしてスクリーンが真っ白になるのだ。係員が

フィルムをつなぎ合わせる間、観客はしばし休憩。のどかなものである。そんな古びた映画館で、私は最前列の土間板敷きで、立ちっぱなしで映画に見入った。

映画好きの両親につれられ、しょっちゅう映画館に通っていたから、「わかば館」の息子であるアブツとも自ずと仲良くなったのだった。

●激辛に涙する

「わかば館」の前では、大柄のでっぷりしたおばさんが若衆二人に看板の架け替えを指示していた。新しい封切り映画の看板とつけ替えらしい。このおばさんこそ「わかば館」のオーナーで、アブツの母親だ。

「おばさん、アブツは？」

「あらセッちゃん、どうしたと。アブツ？　さっきまでいたけんど……、お小遣いあげたから、どうせカレーパン買いやないとお？」

カレーパンを売る駄菓子屋は映画館から五軒ほど先の並びにあり、子どもたちがおやつ買いする人気の店だ。そこで私はいつも乾パンか五円玉飴、かりん糖などを買っていた。

三人はさっそく駄菓子屋に向かうが、その後ろ姿におばさんが声をかけてきた。

「今晩から高峰秀子主演の『二十四の瞳』がかかるとお母さんにいうてえ」

「わかった」

と私は振り向きもせず手を振り、先へと急いだ。

三人が菓子屋の前まで来ると、ちょうどアブツが紙袋からカレーパンをのぞかせてぱくつきながら、店から出てくるところだった。

「やあ、アブツ」

と私が見上げて声をかけると、

「うーん？」

とアブツはこちらを振り向き見下ろして、マユミとヒトミも一緒なので、とまどいながらも、ぎこちなく会釈した。

アブツはしゃべるのが苦手で、会話は「うん」とか「あっち」「こっち」とか「好き」「嫌い」というように、簡単な単語をつないで意思表示する程度だが、こちらの言ってることはちゃんと理解しているのだ。

「きのう家でカレーを作ったから、アブツが好きだと思って。友達のマユミとヒトミも一緒やと」

と私はカレーの入った弁当箱を差し出した。

「これ好き」

と、アブツはその弁当箱を大きな片手で大事そうに受け取って、片手に握るカーレーパンと見比べて、どちらを先に食べるかちょっと迷っている。

「運動場の土手に行って食べよう」

と私が誘うと、

「うん」

と大きくうなずく。

「アブツ、食べたら肩車してね」

と、すかさずマユミが彼の穿いているパンツのポケット口を引っ張りながらおねだりする。

いつも威勢のいいヒトミはおずおずとアブツの様子をうかがっている。町でよく言われるような乱暴者ではなく、意外に優しそうなアブツの態度に少しホッとしたようだ。

四人は来た道を戻って、映画館の前にいるおばさんに、

「アブツにカレー弁当を持ってきたから、中学校の運動場の土手に行って食べようかと思って」

と告げた。

「ほう、アブツよかったね。みんなで遊んどいで。あんまり遅くなっちゃだめだよ」

とおばさんは満面の笑み。

アブツに優しくしてくれる人がいると、おばさんは本当にうれしそうである。町にはアブツをからかう輩が多く、ひそかに心を痛めていたのだ。だから、いつも自分の目の届くところに置き、あまり遠くにアブツを一人でやらないようにしていた。その点、アブツは二十歳を超えてはいたが、私たち子どもと行動半径は大差なかった。

四人は中学校の運動場を囲む土手

にたどり着くと車座になった。さすがにキュウタはもういない。道すがらアブツは駄菓子屋で買ったカレーパンの残りを私たちに少しずつちぎって分け与え、自分も食べかけの分をすっかり平らげていた。

　さっそくアブツはもどかしそうにカレー弁当の包みを開きふたをとる。私とマユミはアブツの一挙手一投足にじっと目を凝らす。昨晩の「カレー事件」でマユミはその激辛さに舌を巻いただけに、アブツがそれをどう食するか興味津々なのである。ヒトミは事情を知らないから、少しは分けてくれるだろうと、羨ましそうに期待半分で見ている。

　弁当につけてあったプラスチックの匙をとると、いつになく素早い動きで立て続けに五口、いっぺんに口にほうりこんだ。そして、もぐもぐ、ごくり。

　すると、おおっ。時間にして二、三秒は経っていたと思うが、アブツはほっぺたを真っ赤にふくらまして、

「うーん」

　と唸った。頭髪からは汗がじんわり滴り目は涙目に。

　さらに「うーん」と唸ると、匙を忙しく動かしていっぺんに五口カレーを口にほうりこむ。そして再び「うーん」と唸る。

　これを繰り返すこと二回、三回……、あっという間に弁当を空にした。

　しまいには目から涙がこぼれ、頭からは汗が滴り、鼻水をたらしていた。その迫力に、見守る三人は声も出せず、すっかり圧倒されている。

「やっぱり辛かったか？」

　一拍おき、私はポケットの鼻紙をアブツに手渡しながら開いた。

「辛い、辛い」

　その鼻紙で、アブツは顔をくちゃくちゃに拭きながら答えた。

「おいしかった？」

　再び私が問う。

「うーん、とても、うまかった」

　とアブツが答えた。

　おおっ、うまかったんだ。思わず三人から、

「わーい！」

　と歓声が上がる。

　アブツでさえ汗びっしょりになるほどの我が家のカレーの激辛ぶり。なおかつ、美味しいこともこの上なしということを、まさにアブツが証明してくれたのである。

●ビビシャンコ大会

　さて、カレーの試食が終わると、みんなでアブツにかついでもらうビビシャンコ大会の始まり。「ビビシャンコ」とはここらの方言で、「肩車」のことだ。

「よっしゃアブツ、ビビシャンコして」

　とマユミが一声。

「高い高いか？」

　とアブツがマユミを見て言う。

　土手の上にマユミが立つと、傾斜する下手にアブツが猫背になってしゃがむ。その背中に馬乗りになって、肩まで移動して跨ぐマユミ。その小さい足をむんずとアブツは掴むと、すっくと立ち上がった。

「うわー、高いなあ」

　とマユミは歓声を上げる。

「高い高―い」

　とアブツ。

「ジャンプ、ジャンプ」

　とマユミが催促する。

　アブツは土手の中腹から頂上までジャンプしながら一気に駆け上がった。

　私も経験があるが、１９０㎝の大男にまたがった肩車は、ジャンプすると大空に舞い上がっていくようで、とてもスリリングで興奮する。マユミは前にもアブツにやってもらったことがあり、その快感を忘れられないのだ。しかし、その時は、何度か繰り返すうちにアブツが坂のくぼみに足を取られて躓き、マユミは宙に放り出され、脳震盪を起こしたのである。そんなことも忘れて、ちっとも懲りないのがマユミである。

　さんざんマユミがやってもらった

後は私の番、最後はヒトミの番である。

「えっ、私もやると？」

おませなヒトミは、今さらビビシャンコなんて幼稚で恥ずかしくてできないというポーズをとり最初は渋っていた。が、面倒くさい性分と言うか、本音はやってほしいと顔に書いてある。すでにこの年で外聞を気にするようなかけひきを身に着けているのである。

で、私たちの説得にしょうがなくといったポーズで、アブツの肩におずおずと跨った。すると、アブツはまるでロデオの馬のようにジャンプしながら坂道を駆け出した。

「ひぇぇーっ」

とヒトミが叫びアブツの頭にしがみつく。恐怖で無我夢中のため、ヒトミの両手がアブツの両目を覆ってしまった。

とたんにアブツは方向感覚を失い、運動場の砂場に足を取られ膝からがくりと崩れ落ち、ヒトミは砂場に放り出された。

すぐにヒトミは砂まみれの顔で立ち上がった。それを見て大笑いする私とマユミ。

「もう絶対にビビシャンコなんかしないから」

ヒトミは怒って宣言する。

アブツは、悪いことをしたとばかりに体を丸めてしょんぼり。

「ごめん、ごめん」

と何度も謝った。

そして、何を思ったのか、アブツは立ち上がって得意の丸石呑みを始めたのだ。握りこぶし大の石をいつもポケットに忍ばせていて、それをごくりとのみ込んでは遠くへ吐き飛ばす、彼の隠し芸である。

「いよっ、アブツ、すごーい」

と私とマユミが囃したてると、立て続けに三、四個の丸石を呑み込み、遠くへ吐き飛ばした。ときにはそのまま本当に呑みこんでしまうらしいとの噂が子どもの間でまことしやかに流れていたが、真偽のほどは定かでない。

この時はひたすらヒトミの機嫌をとろうとやった行為である。その姿にヒトミも哀れを感じたのか、

「もう大丈夫、そんなにしょげんで」

と機嫌を直した。

とまあ、アブツが脱線すると、とんでもないことが起こるのだ。

後は私の番、最後はヒトミの番である。

「えっ、私もやると？」

おませなヒトミは、今さらビビシャンコなんて幼稚で恥ずかしくてできないというポーズをとり最初は渋っていた。が、面倒くさい性分と言うか、本音はやってほしいと顔に書いてある。すでにこの年で外聞を気にするようなかけひきを身に着けているのである。

で、私たちの説得にしょうがなくといったポーズで、アブツの肩におずおずと跨った。すると、アブツはまるでロデオの馬のようにジャンプしながら坂道を駆け出した。

「ひぇぇーっ」

とヒトミが叫びアブツの頭にしがみつく。恐怖で無我夢中のため、ヒトミの両手がアブツの両目を覆ってしまった。

とたんにアブツは方向感覚を失い、運動場の砂場に足を取られ膝からがくりと崩れ落ち、ヒトミは砂場に放り出された。

すぐにヒトミは砂まみれの顔で立ち上がった。それを見て大笑いする私とマユミ。

「もう絶対にビビシャンコなんかしないから」

ヒトミは怒って宣言する。

アブツは、悪いことをしたとばかりに体を丸めてしょんぼり。

「ごめん、ごめん」

と何度も謝った。

そして、何を思ったのか、アブツは立ち上がって得意の丸石呑みを始めたのだ。握りこぶし大の石をいつもポケットに忍ばせていて、それをごくり

とのみ込んでは遠くへ吐き飛ばす、彼の隠し芸である。

「いよっ、アブツ、すごーい」

と私とマユミが囃したてると、立て続けに三、四個の丸石を呑み込み、遠くへ吐き飛ばした。ときにはそのまま本当に呑みこんでしまうらしいとの噂が子どもの間でまことしやかに流れていたが、真偽のほどは定かでない。

この時はひたすらヒトミの機嫌をとろうとやった行為である。その姿にヒトミも哀れを感じたのか、

「もう大丈夫、そんなにしょげんで」

と機嫌を直した。

とまあ、アブツが脱線すると、とんでもないことが起こるのだ。

●アブツの災難

私らにとってアブツは頼もしい用心棒でもある。子どもたちの遊び場の縄張り争いは熾烈だ。そんな時、アブツがこちら側に味方してくれれば百人力。相手はすごすごと引き下がるしかない。ただ、アブツが暴走すると手が付けられない。そうして、アブツをめぐり思わぬ悲劇が起こったのである。

姉マキコの喧嘩ライバルに、キョウコという同級生がいた。何かというと姉に嫌がらせをする。しかも子分をいつも五、六人ひきつれているから質が悪い。古典的な嫌がらせとして、靴箱の靴を隠したり、教室の机の引出しに虫の死骸をいれたり、給食パンにハエを載せたりなど。もちろん、姉も気が強いから泣き寝入りはしない。面と向かって抗議したり、相手が手を出せばすぐにやり返す。しかし、陰湿な証拠のないような嫌がらせには対応の仕様がない。

思い余って担任の先生に言い立てたところ、相手にもしてくれないという。鼻柱の強い姉は先生に対しても従順ではなく、相手が先生であろうと、間違っていると思えばすぐに口答えする。「自分は間違っとらんもん」というのが口癖だから、先生からすれば可愛くない生徒である。しかも、ライバルのキョウコは小学校のＰＴＡ会長の娘で、担任の先生のお気に入り。依怙贔屓もすごい。キョウコもキョウコで、先生の前では行儀よくして裏に回るといじめっ子という、少女マンガか学園ドラマに出てくるような典型的パターンなのである。

そのようなあらましを、学校から帰るとぷりぷりしながら母に言い立てる姉マキコ。おのずと小さな私の耳にも、「姉がキョウコにいじめられている」と、しっかりとインプットされる。

そんなある日、アブツと駄菓子屋に行ってカレーパンを買い、いつもとは違って役場近くの公園広場に行った。すると、そこにキョウコとその取り巻き連が下校の途中で道草していたのである。

私はギロリとキョウコを睨みつけた。

その視線に気づいたキョウコが、

「何ね、あんた」

と険しい視線を返してきた。取り巻きの一人がキョウコに耳打ちする。

「はーん、マキコの弟ね、そういえばちょっと似とるね。アブツと何しよるが」

とキョウコがからんできた。

「姉ちゃんいじめるな」

と私は睨んだまま返した。

「なに生意気言うて。そうたいね、マキコもバカなら弟もバカに決まっとるわね。あのアブツと遊ぶくらいやから」

それまで何が起きているのかさっぱり要領を得ていなかったアブツ。ただただ私とキョウコ達をきょろきょろと見比べてカレーパンをほおばっていた。そして、自分の名前がキョウコの口から出るに及んで、どうやら自分に悪意を抱いている相手と認識したらしい。

「姉ちゃんをいじめるな」

私は睨みつけながら同じ言葉を繰り返し、声を張り上げた。

すると、キョウコが、

「まだ吠えとるわ、バカ犬が。ほれ、これでもくらえ」

と足元の石ころを拾って投げてきた。それを合図に取り巻き連も一緒になって、私とアブツの方に石礫をしつこく投げつけてくる。

その石礫の一つがカレーパンを持つ片手に当たり、その拍子にアブツはパンを地面に取り落とした。

「うーん」

アブツは唸るなり屈みこみ、カレーパンの土汚れを必死にぬぐおうとする。そこに追い打ちをかけるように、

「やーい、バカバカバーカ、ア・ブ・ツ、やい、ア・ブ・ツ！」

とキョウコ達が憎々しげに囃したてた。さらに、私には、

「バカ、チビ、チンドンヤ」

とからかいの声を投げつけてきた。

すると、それまでおとなしかったアブツが、

「うおお――っ！！」

と大声で吠えて、キョウコ達の方に突進していったのである。悪意をもってからかわれる時は一文字一文字きって「ア・ブ・ツ」。そう呼ばれるとアブツも怒るのだ。

「きゃあー、逃げろ！」

キョウコ達は叫んで四方八方に逃げ惑った。鈍足のアブツにはなかなか捕まえられない逃げ足の速さだ。

ところが、運悪く公園の花壇の柵に足を引っ掛けて転んだ者が一人。その足をむんずとアブツに掴まれてしまったのだ。それは誰あろう、キョウコであった。

「ぎゃああー」

キョウコは何とも異様な悲鳴をあげた。その声に今度はアブツが驚いた。

「うへえ？」

しかし、アブツの手は、倒れたキョウコの足をがっしりと掴んでいる。

「許してえ、許してえ」

と、泣き叫ぶキョウコ。

戸惑い気味のアブツは、私の方を見て、どうしようかと思案顔である。

「姉ちゃんをいじめるな」

私はキョウコに向かって再び低い声で言い放った。

「もうしません」

と何度もしゃくり上げながら泣き続けるキョウコ。その怯えぶりを見て、充分に懲らしめたと思った。

「アブツ、もう手をはなしてやりな」

私は優しく声をかけた。

「うん」

とアブツは合図地を打ち、キョウコの足を放した。

私たちはそのまま公園を後にした。後ろを振り返ると、キョウコは放心したように地べたに座り込んでいた。

私とアブツは駄菓子屋に立ち寄りカレーパンを買いなおして、「わかば館」に戻って一緒に食べた。

ここで終われば万事めでたし。ところが世の中は不条理だ。この事件はすっかり町の噂となった。

キョウコの取り巻きの一人が「アブツに襲われた」と親に告げ口したのである。しかもあろうことか、「キョウコが捕まってひどいことをされた」と尾ひれまでついて広まった。

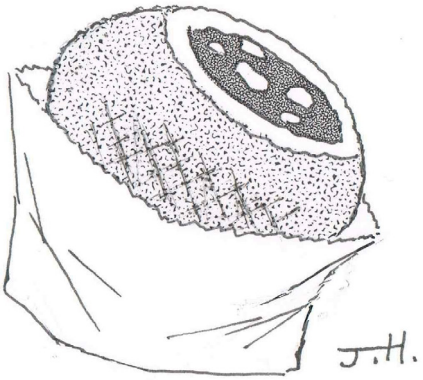
当のキョウコは親に問い質されてすぐに否定したが、周りには押し黙ったまま。その態度が周囲によけいに誤解を生むことになったのだ。

噂を聞きつけた「わかば館」のおばさんはひどく心を痛めた。私からの報告でアブツが何も悪くないことはわかっているおばさんだったが、浮かない顔で何か思いつめている風であった。それが何を意味するか、その時の私には知る由もなかった。

これはずいぶん後でわかったことだが、その事件があってしばらくして、おばさんはアブツに男性の避妊手術を受けさせたのだ。何とも悲しい話である。アブツが性犯罪を引き起す心配をしたというより、そういう噂が流れること自体がアブツの不幸になると思っての処置らしい。

私がキョウコを懲らしめようと思わなければ、アブツを巻き込むこともなく、へんな噂が広まることもなかった。そして、おばさんがアブツに手術をさせようと悩むこともなかったので

はないか。そう思うといたたまれない気持ちになる。

幼い私には、アブツが避妊手術を受けたと聞いても、何の事だか分らなかった。アブツの身にふりかかった世の不条理、ひょっとしてその片棒を担いでしまったかもしれない、五歳の私であった。

了